

第5回 京都御苑ずきの御近所さん

香老舗 松栄堂 代表取締役社長 畑 正高 様



松栄堂様のホームページには『今から300年ほど前。丹波篠山の里長であった畑六左衛門守吉が商いの道を興した「笹屋」に始まります。御所の主水職を勤めた3代目守経のころ「松栄堂」として本格的に香づくりに携わりました。以来、12代目に至る今日まで、香づくり一筋に歩んでいます。』と書かれています。3代目の守経様がお香づくりを始められた経緯をお聞き及びでしょうか。

私どもの先祖である畑一門が丹波篠山の田舎から京都に出てきた経緯というのは、東山の青蓮院様と御縁があったお蔭だと聞いています。ただ、お香づくりを始めたきっかけというのは特に伝わっておりませんが、この場所・二条に御縁があったからだとは私と考えています。

二条という町は漢方薬・薬の町ですね。江戸時代に外来の漢方薬とその情報が集散したところですよ。漢方薬は薬であるとともに、香料や染料の素材でもあります。その地に私どもの先祖が丹波篠山から出てきて御縁を頂き、御所にお勤めしたことが香りづくりを深めていった理由の一つだと思っています。

以前に染色の人間国宝の先生とお話していましたら、

「なあ畑君、二条があるさかい、わしらの仕事があるんやなあ」とおっしゃるんです。「友禅の染料は漢方薬と同じ。君のところも同じだろ」と。ああそうか、それで二条の向こう、堀川の水のある辺りに染めの世界があるのか、と学びました。私もよく社内で「二条の神農さんという薬の神様（薬祖神やくそじん）を忘れたらあかん」と話題にします。

もう一つ、私どもが香りづくりを深めていけた経緯に仏教との御縁があります。私の家は不思議なことに、仏教の中でも海を渡って学んで帰ってきた宗派の方々に、江戸時代からずっと御指導して頂いてきました。その関係があったからこそ香料の専門家になれたのだとは私思っています。

今も妙心寺様や大徳寺様などでの大きな法要の時には、「10年前の法要と同じお香を準備して」と、御注文を頂きます。お寺の方々がこちらを信頼して「同じものを」と御注文して頂いていることに感謝しながら、お香の専門としてこれからも長くお付き合い、御指導頂けたらと願っております。

そういった信頼関係が昔から今に至るまで続いているからこそ、文化が育まれていきます。他の町では忘れ去られ、京都にだけ残っていることがたくさんあります。

先日、久しぶりに新潟県の柏崎に行ってきました。そこに古くから残っている「綾子舞」という民族芸能があった。地元の方は「500年前からの伝統や伝承が大事」とおっしゃっていました。

それは同時に、京都人の私から言わせてもらおうと、500年前に応仁の乱で廃墟となった京都を逃れた人々によって伝えられた当時の都の文化の伝承なのですよ。

そこには、京都のことや京都でも忘れられていることがいっぱい歌い込まれています。そういうことが実は日本の文化圏にはあるんです。その辺を摺り合わせて考えてみると、京都というとんでもないコンテンツが見えてきます。

**御社は、本年7月に「環境宣言」を
発表され、環境管理重点テーマの一つに
“生物多様性の保全”を挙げられました。
その一環で、稀少植物のフジバカマの育成や
オグラコウホネ生息地クリーン作戦などに
取り組んでおられます。
生物多様性の保全を環境管理重点テーマに
含められた思いをお聞かせください。**

環境管理というと温室効果ガスの削減や廃棄物に取り組んでいるというのが多く、一般的には、二酸化炭素の問題などに意識がいきますよね。ですが、我々が生活する上で生物多様性がなければ日頃の食事も、会社の経営も成り立ちません。

そのことを意識していくと、私は本当に松栄堂の仕事って不思議だと思うんです。日本という国の、京都という場所で、日本の香りを私たちはつくっています。しかし、そのための原料は日本にはなく、東南アジアを中心とした、中国も含めた、広いアジア一円にあるんですよ。アジアで育まれた自然の産物をここに運んできて私たちが関わると、世界の人が日本文化だと思われる、我が国独自の伝統的な香り文化ができあがるのです。非常に不思議なんです。

例えば、丁子 (clove) はお香の原料の一つです。それは日本文化にはなくてはならないものであり、同時に香料素材や薬として多様性をもちます。日本の生活文化

にとって丁子がなくてはならないことを、私たちは気づかされます。

違う角度から言いますと、モデルフォレスト事業というカナダから始まった活動があります。京都府内でも植林し、育った木を木材にして地元の生活で使おうという活動で、京都府も非常に積極的に取り組んでおられます。私たちもモデルフォレスト事業に参加し、もちろん京都府内の森にも関わるんですけど、それと同時に、松栄堂が植林するなら香料の原材料を産出する土地であるアジアに1本でも植えたいと願い行動に移すのです。

また、丁子や桂皮などいろんな植物を香料として使っているからこそ、植物そのものはどういうところで、どんな動植物と一緒にどんな生活をしているのかを学ばなければならないと考えています。そのために会社にも温室をつくって香料の素となる植物を育てるなどの実践をしています。

また、環境活動の一環として、長岡京にある工場周辺で清掃活動を行っています。清掃活動中に、新幹線の高架下、自転車とかが捨ててある汚れた水の流れの中に小さな花をつけている水生植物を見つけました。調べてみたらレッドデータブックに載っているオグラコウホネだということがわかりました。

私たちも社員研修で掃除することでオグラコウホネの自生地が守れるし、長岡京市もそのことにとっても喜んでくださる。オグラコウホネの自生地を私たちが見つけて話題になってから、周辺の川も地域社会の方々が掃除してくれはるようになったんですよ。社会の広がりってそういうことやって、私たちも勉強させてもらいました。

また、この清掃活動を機会に「乙訓の自然を守る会」のみなさんと出会って、いろんなことを教えてもらいました。『源氏物語』千年紀だった2008年に向けて、社内でフジバカマを育成しました。育成を始めた1.2年後にテレビ局のKBS京都がキャンペーンを始めて、1番多い年だと150,60鉢くらい育成し、京都市内中心に配りました。料理屋さんやお寺、お茶屋さんに行って行くと、みなさん毎年楽しみにしてフジバカマを玄関に飾ってくださるので、毎年配るようになりました。

そのフジバカマは「乙訓の自然を守る会」のみなさん

が原生種として管理されています。放ったらかしておいたら他の種と交配してしまいますから、花が枯れたら全部回収しています。

フジバカマはね、枯れた葉っぱを乾かすと香りが楽しいんです。7月頃の間伐の時会社の人みんなで葉を刈ってもらい、それを乾燥させて匂い袋をつくります。毎年できる数は限られていますけど、実際に自分たちが育てたフジバカマの匂い袋って、ストーリーがありますよね。

日本には香りはたくさんあります。でも香料素材としてはみんな淡泊すぎてほとんど力がないんですね。例えば春の沈^{しん}丁^{ようげ}花と秋の金^{きん}木^{もく}犀^{せい}。日本人にとって季節を彩る花の香りの代表格です。ですが、その二つの香りを正月に合わせて一緒に使うことはできません。両方ともその季節の刹那的な、はかない出会いでしかない。それが日本の、この国土の出会いってきた香りだと考えます。

そういった中で、素材としても生き残ってくれる香りというのは貴重です。さらにいうと、命が萌え出ずる春に香りがすばらしいものが多いのです。しかし、フジバカマは秋の消え入る時にふっと香る。それがなんともいえない物悲しさというか、表現の手だてになっただけでしょうね。心が静まっていく時の懐かしさの余韻みたいなものがあって、それが古今集などに詠まれた和歌の世界ですよ。その香りをその季節である秋に楽しむっていう、とても楽しいことが体験できる訳です。ちょっと歴史や文学に踏み込んで勉強すると、いろんなことが、京都というキーワードとともに出てきます。

もう一つフジバカマの面白いのは、アサギマダラという蝶を呼び寄せることです。烏丸二条にある本店の店頭にある2つの鉢にもアサギマダラが来るんです。こんな排気ガスの中みたいなのところでも、アサギマダラがちゃんとフジバカマを見つけるのが不思議です。日本のアサギマダラは台湾まで飛んでいくと聞いて、本当にそういう自然の中で私たちも生かされているんだとつくづく思います。

さらには、私どもの活動の中に、北山での活動というものもあります。

山に出掛け、自分たちで丸太から椅子や机をつくったり、新しい植物を植えて雑木林に少しでも戻していく取

り組みをしています。

それとグリーンウェブ。国連が提唱した植樹や森林保全活動のことですが、ぜひ今後も参画したいと思っています。環境省が日本語版グリーンウェブサイトを、国連のサイトとは別につくられたことで、みなさん国内のみの活動だと誤解されているせいか今一つ盛り上がりなくて残念です。地球上にグリーンのウェブを起こしていく。その結果、たくさんの木が育つ。本当にすばらしく、楽しい活動です。自分たちで取り組んでいる活動と、生活とを関連付けて情報発信したらいいと思うんです。

「乙訓の自然を守る会」の自然に詳しい方だとか植物園の方だとかいろんな人たちが、日本で暮らすことの楽しさを会社の若い人たちに教えてくださるんです。いろんな方との出会いの中でポジティブに関わって、若い世代を見守りながら自分たちの経験を伝えていく、まさに世代の継承ですよ。京都の歴史そのものです。

今回で32回目を迎える「香・大賞」について、応募作品は、その時代や状況に強く縛られていると思います。第1回目から振り返り、直近の第31回目までの特徴（傾向）について教えてくださいませんか？

毎回エッセイで約2,500～3,000通程の応募があり、それを100前後の作品に絞り込み、最終審査会をします。30年前と今とで絶対的に違う作品群のテーマは、戦争です。30年前には戦争の記憶を800字の中に書かれる方がたくさんいらっしゃいました。

その中で記憶に残るエッセイがあります。召集令状を受け応召される時、近隣の人が万歳三唱に来てくださった。挨拶に出る間際、暗い階段の下で抱きしめてくれた母親の匂いを書いたエッセイです。応募されたのは70.80歳の男性ですが、若い頃の記憶をずっと鮮明に留めていらっしゃった。この方は戦争から生還されたからこそ、それが書けるのであって、同じ思いをされても生還できなかった方のほうが圧倒的に多いと思うと、戦争というものを改めて考えさせられます。

もう一つ、忘れられないエピソードが炭鉱の中のアンモニアの一升瓶の話です。

炭鉱の暗がりの中、トロッコで下って行くと、等間隔で嫌な匂いを放つアンモニアの瓶が置いてある。その瓶の本数でどれだけ自分たちが距離を進んでいるのか大体わかるようになっている訳です。炭鉱内で粉塵爆発や異常事態が起これると、瓶が割れて強烈な匂いが拡散される。暗闇と騒音とで目も耳もほとんど使えない中で、危険や非常事態が肌でわかる。アンモニアの匂いが命をつなぐ最後の砦となる。そのエッセイを読んだ後、アンモニアを悪臭とは絶対呼べなくなりました。香りの定義を考えさせられました。

その後、時代が推移し、企業戦士で心に疲れを感じて癒しを求める男性のエッセイなどが多くなりました。疲れて自宅に帰り妻の胸に飛び込む。その瞬間があるから僕はまた明日も会社に行けるっていう、これ実名で活字化して大丈夫かな？というエッセイもありました。少なくとも30年前の戦争のエッセイを書かれた方たちは、そういうタイプのエッセイは書かれなかったですね。時代の移ろいを感じます。

以前は海外の体験に関するものも結構ありましたが、最近はちょっと減っているかもしれません。例えばイタリヤの市場で買ったトマトの色や香りの記憶なんかを書かれる方がありました。渡航前に、ある程度知識を得て海外に出ることが増えたのでしょうか。最近、海外に対する新鮮さみたいなものが緩んでいるのかもしれません。

今後、「香・大賞」に投稿されるエッセイのテーマの変化は想像できませんが、例えば、この30年で肉筆の原稿が随分減少しています。かく言う私も原稿は全部パソコンで打ってしまう人間なんです、実はメールでの投稿だけはまだ受け付けていません。その理由としては、「京都市中京区烏丸通二条上ル東側松栄堂内」と書いてもらうことに意味があると考えているからです。やっぱり企業の広報活動ですから、それをクリック一つで応募できるようにしてしまうと、意味もなくなってしまい、そこまではするつもりはないですね。インターネットの世界の外でないとダメだと私は考えています。

畑様の思い出の中で、京都御苑にまつわるものはありますでしょうか？

そりゃあもういろいろあります。野球をしたり、茂みの中にトンネルや陣地をつくったり、蝉採りなどをしたり、そういう遊び場でしたね。例えば、間之町口を入ったところで、木の上に登ったままどうやって下へ降りずに一周するかという遊びをしました。今から思ったら、ようそんなことしていたなって思うんですけど。

他にも、野球やソフトボールは堺町御門を入ったところの広いスペースでやっていましたね。大宮御所や仙洞御所の塀を越えたらホームランっていうルールで、何度も中にボールを取りに行かしてもらって。今なら壁にボールでも当てたらえらいことになる。大体あの砂利のところで球技をするなんて今なら考えられません。

私が子どもの頃は、学校の終わりや土曜日の昼から御所に出掛けました。御所では他所の学校の子もたちと接触があり、それがまたちょっとした冒険なんですよ。野球する場所も取り合いですよ。子どもなりの社会的な広がりがある場所だったんですよ。近所の公園で遊んでもそうはいかないし、御所っていい空間でしたね。

あと、拾翠亭の塀際に沿って、溝に落ちないようにずっと歩きましたが、途中で足を滑らしてぐっちゃぐちゃに濡れて帰ったのを覚えています。そんな思い出がいっぱいですよ。とにかく、よい遊び場でした。

今から考えると別に御所だけじゃなくて、社会全体が大らかでしたよね。道でも野球をしていましたし、子どもたちもたくさんいました。そういうことに対する社会の許容量が、今とは違ったんでしょうね。

また、私自身にとって格別な御所の思い出があります。10歳の時、東京オリンピックの年（昭和39年）ですが、祇園祭の長刀鉾の稚児を勤めさせて頂いたんです。

当時の長刀鉾の稚児は御所に御挨拶に上がって拝舞をしました。それが全然表には出ない行事なんです。鉾の上で稚児が勤める時は、もちろん介添人が後ろにいてくれますし、他の禿^{かむろ}さんという同世代の子たちと一緒に舞うんですが、この時は違いました。衣冠という衣装を付けて、大人のみなさんは後に並んで見守っています。舞

うための音楽とか何もない静粛な空気の中、紫宸殿の白砂の上でたった一人で舞った時、非常に緊張したのを覚えています。綺麗な世界を訪ねた、自分の中のすごくよい思い出です。

京都御苑で好きな場所、好きな時期などありますか？

拾翠亭を拝借して聞香の会をしたことが、過去に何度かあります。いい機会だと思います。ただ人数があまり入れないので、最近では梅小路公園の中の緑の館を使うことが多いんです。拾翠亭の2階に南向きの小窓があります。その窓枠の透かし彫りは、丁子紋なんですよね。すごいマニアックなことを知っているでしょ。

前述の通り、丁子というのはクローブのことで、まさにお香の原料です。私どもが日常で香料として使っている丁子は、丁子紋という文様として昔から親しまれていました。何故かという古来中国から伝わった宝尽くしの一つで、打ち出の小槌やカギとかと同じ大切な宝物だったんですよ。

そのことを今消費させてもらっている私たちは考えないといけない。ただスパイスでおいしいし、匂い袋に入れたらいい匂い、とかそういうふうな発想だけではないのです。丁子が宝尽くしの文様に入っているっていうのは、香料を扱う人間としてとても誇りに思っているし、それがまた九條家の建物の透かし彫りの中にあっただっていうのは感慨深いものがありますね。

そして、私が御所で一番好きなのは、梅林の南にある大きな榎えのきです。

これは私の人生観になっています。新緑の頃から今の時期も木陰がとてもよくて、早朝に行くと大きな根っこに学生さんが腰掛けてフルートを吹いていたりしますね。冬、葉が落ちた時に朝日が当たると陰影のコントラストがそれはもう綺麗で本当に格好いいです。

立派な木ですが、上を見るとヤドリギなどの他の種の植物が枝の分かれ目に根をはって寄生していたり、蜂が巣をつくったりしています。夏には蟬の抜け殻がいっぱいいます。

私はあの木にももの考え方を教えてもらったんです。あの木を見る度に、あれだけ大きく育つのにどれだけの大きな根っこが下にあるのか想像します。あれだけの木が育つのに、根っこをどんなに張っても誰も文句を言わないんですね。

それは私たちも同じです。どういう本を読むか、どういう人の話を聞くか、どこへ足を運ぶか、どういう時間の使い方をするか。こうしたことのほとんどは自分の自由です。特に今の時代はそうです。その中で、自分の根っこをどのように張って、滋養を求めて、それを幹、枝、葉、花、実にするかが大事なんです。そうすると樹木としての姿を絵に描いてくれる人がいたり、木陰を楽しむ子どもたちがいたり、根っこに腰を掛けてくれるお年寄りがいたり、また鳥が巣をかけたことが起こるのです。

そうやって社会的に自分の命を全うしていることが、他の人から見てまた需要があるんですよ。その木の存在を享受する他者という存在が社会には多様にあるのです。みんな地上に見えている部分をみて、ああ綺麗だとか大きいだとか立派だとか腰かけようとか思うんだけど、それと同等の根っこを張っているということに思いを馳せることはほとんどないでしょう。

そう思うと、あの木の本懐、つまりあの木は何のためにそこにいるのかっていうことを考えるに至ります。木陰を楽しむ人のため、他の植物がそこに宿るため、鳥たちが巣を結んだり蟬が頼ってそこで抜け殻を残すことが、あの木の目的じゃないんですよ。あの木の目的は自分をここまで育ててくれた土壌を、次の世代に、より豊かに渡すことなんですよ。その木そのものが何をしたかというよりも、その木を育ててくれた豊かな大地をより豊かにして次の世代に委ねること。そうすると次の世代はたんぼぼ一輪としてでもまた命を全うする訳だね。

自分も含めて人間社会も同じだと思わされます。命を育むことはどういうことかっていうと、命を育ませてくれた土壌環境、自然環境すべてをより豊かなものにして次の世代に委ねることが命の責任なんだって、あの榎を見て思うようになったんです。

あの榎はいつもながら枝を頑張って伸ばすので、電線

にひっかかったら枝は切られるんですが、人もやっぱり同じです。社会には自分の提案が通らないことがいっぱいあります。それですぐに気持ちが負けてしまったり、ネガティブになったり、腐ったりする人もいっぱいいます。でもそういうことはあってしかるべしだと思うんですよ。それよりも自分がアイデアや発想を生むきっかけをもらった、過去の人との出会いとかそういうことが大事だと思います。

科学が発達している時代ですが、次世代に責任の持てないこと、環境悪化を引き起こすことはやってはいけないということも、あの榎に教えられましたね。私にとってあの榎は哲学であり人生観になっています。

京都御苑の今後について、御意見など ございましたら自由にお聞かせください。

まず、烏丸通の歩道を御所（京都御苑）の中に入れたらどうかと思います。烏丸丸太町の狭い交差点で東側（下立売御門～丸太町）の歩道を石垣の内側に取り込んでくださったらどんなにいいかと思っています。

あれは百数十年前に烏丸通を拡幅した時に、烏丸通側が御所側に遠慮して西へ広げ今のようにした訳です。それから百数十年たった今、国際観光都市京都として烏丸丸太町の交差点をより安全・快適・スムーズに利用できるよう、今度は御所側が前向きな提案をされたら素晴らしい事例になると思います。

自転車や歩くことを推奨している京都市と環境省ですし、あそこは車線がとても狭くて右折することも危ないですから、入口2つ分くらい中に入れたらいいなと思いつつも通っています。

御所の中についてはこのままであって欲しいと願っているんですけど、できるなら復活して欲しいと思うのは御所水道です。もしも御所水道があれば、震災が発生した時140万都市といわれる京都のかなりの部分の災害対策の水として、飲料水だけでなく排水・下水も含めて非常に貴重な水になると思います。

奈良の都が百年足らずで終わったのは、何故かという水がなかったからなんですね。やっぱりあれだけの人

があそこに集まって病気とかを洗い流す自然の力がなかった。大和川ではものの交流はできても、たくさん人の生活をリセットするだけの力はなかった訳です。京都は病気とか火事があっても、それを流してしまう水の力が圧倒的であったからこそ、ここに人を千年も集積していられたんです。

それを思うと水っていうのはどれほどに都市生活に不可欠か。それを百数十年前に先人たちが琵琶湖の水をここへ持ち込んでくれた。殖産工業のためにやっていた仕事の結果として京都市民のための飲み水が確保され、御所水道や本願寺水道の防火水なんかも含めてプラスアルファで生まれた素晴らしいものを、簡単に壊してしまうというのは許しがたいと思います。広い視野を持たず、そのことだけ見ているからそういうことになるんです。

京都の災害対策の水を確保するためという大名目をみんなで共有するべきだと思います。平成の御所水道を京都の災害対策のために整備してもよいのではないかと考えています。

あとユニバーサルデザインに関して、以前、御所（京都御苑）のバリアフリー化の取り組みに参加した時に私はなるほどなあって勉強させていただきました。

私が提案したのは、アメリカの空港でよく見かけるコータシーバスを御所内でも運行しようというアイデアでした。コータシーバスというのは空港内をずっと回っていて、ハンディーキャップのある方や御高齢の方をターミナルからターミナルまで送っていくバスで、電話一本で来てくれるんです。御所の中にそういうバスがあったらいいなと思っていました。バスも御所の中に似合うような形・デザインに仕立て、京都迎賓館にお越しになったVIPも、障害のある方もどんな立場の方も、丸太町通の堺町御門でバスに乗り換えてもらって迎賓館まで乗って行けたら楽しいと思って提案したんです。普段は有料でもいいですから、一般市民で希望される方にサービスを提供できたらいいと思います。

VIPが迎賓館に京都御苑の南側の堺町御門から入れないことを本当に勿体ないと思っています。堺町御門から入り、真っ直ぐに紫宸殿に向かって北山の景色を正面に東山を右手に見ながら進んで欲しいと思うんです。

例えば、バッキンガム宮殿の前の道や、ニューヨークだったら5番街とかね。それぞれの町の顔っていうのもありますよ。京都御苑の中に迎賓館ができた以上、きちっと南側からお入り頂きたいなって思っています。

私は、御所という空間を大事にして欲しいと思っています。その一つとして2月10日頃の朝6時頃に紫宸殿の前に集しませんかというお誘いを講演会の際にしています。「春はあけぼのようよう白くなりゆく山際」というフレーズは有名ですが、京都の鴨川の西、堀川の東から眺める東山の距離感は誰もご存じありません。

天気によりますので、その日に必ず「紫立ちたる雲」がかかるとは限りませんが、それでも毎年起こっていることなのです。できたらビルの屋上からではなく、紫宸殿の前でみんなで待ってみるというのも、すごく臨場感があって感動的だと思います。あの空間を大切にしていきたいと思います。

2016年9月12日 インタビュー

聞き手：田村省二，山本昌世

○畑 正高さまプロフィール○ 1954年、京都市生まれ。同志社大学商学部卒業後、渡英。翌年、松栄堂入社。1998年に代表取締役社長に就任。事業だけでなく環境省「かおり風景100選」選考委員・京都府教育委員などの公職や同志社女子大学非常勤講師、香道志野流松隠会理事などを務め、香文化普及のため国内外で講演や文化活動にも取り組む。著書に『香三才』（東京書籍）、『香清話』（淡交社）、関連書籍に『香千載』（光村推古書院）などがある。